

お茶の淹れ方講座がもたらす認識と行動意図の変容

—SCAT を用いた質的分析—

○木戸彩恵¹・齊藤 涼²※

(1 関西大学・2株式会社 福寿園)

キーワード：緑茶，日常実践，行動変容

Changes in Perceptions and Behavioral Intentions Induced by a Tea Brewing Workshop:

A Qualitative Analysis Using SCAT

Ayae KIDO¹, Ryo SAITO²※

(1Kansai Univ., 2Fukujuen)

Key Words: green tea, daily practice, behavioral transformation

緑茶は、日本の生活文化を象徴する存在であり、人と人をつなぐ文化的役割を担ってきた(細川, 2020)。たとえば「お茶飲み」の習慣では、会話や交流を通じて関係性が維持されてきた(松山, 2016)。しかし近年では、急須で緑茶を淹れる機会が減少し、ペットボトル茶飲料の利用が増加している(農林水産省, 2024)。この変化により、お茶は利便的に消費される一方で、本来のコミュニケーション機能や文化的価値が十分に活かされていない可能性がある。

一方で、家族内の会話機会の減少や人間関係の希薄化が指摘される現代において、お茶を囲む時間は、対話やリラクセスを生み出す契機となることが期待される。また近年では、お茶に対する関心も「味わい」中心から、抽出条件や器具、さらには人や場面といった文脈の要素へと広がっている。

そこで本研究では、製茶会社従業員によるインストラクションを通じて正しい淹れ方を学び、実際に飲用する短時間の体験に着目し、この体験が参加者の認識(気づき)と行動意図にどのような変化をもたらすのかを自由記述データを対象とした SCAT 分析により検討する。

方 法

研究対象 本研究では、イベント参加者から得られた自由記述データを分析対象とした。データは、異なる2回のイベントに参加した協力者から収集された計31件の回答(大学生を対象としたイベントA:14件(平均年齢20.3歳)、社会人を対象としたイベントB:17件(平均年齢55.9歳))で構成される。

イベント概要 参加者に対して、実施者がお茶の淹れ方に関するレクチャーを行い、実際に緑茶を淹れて飲用する体験を提供した。所要時間は飲用時間を含めて約15分であった。体験終了後にアンケート調査への回答を求めた。

アンケート設問 Google フォームを用いて自由記述形式で回答を求めた。倫理的配慮として、回答に先立ち研究の目的および回答内容の利用方法について説明し、研究参加は任意であり、回答しない場合にも不利益が生じないことを伝えた。その上でインフォームドコンセントを得て匿名アンケートを実施した。Q1「体験を通じて得られた気づき」、Q2「日常生活への活用意図」についてそれぞれ回答を求めた。

分析方法 本研究では、自由記述データの分析にあたり、SCAT (Steps for Coding and Theorization) を用いた質的分析を実施した。具体的には、各回答について(1)テキスト中の注目語句の抽出、(2)それらの語句の言い換え、(3)言い換えを説明するテキスト外の概念の付与、(4)テーマおよび構成概念の導出、の手順に従って分析を行った。さらにQ1(体験による気づき)とQ2(日常生活への活用意図)を対応づけて整理することで、体験による認識の変化と行動意図との関係性について検討した。

結 果

分析の結果、参加者の認識(Q1)は主に「心理的価値(リラックス・落ち着き)」「味覚的価値」「技術的理解(淹れ方・温

度)」「文化的・体験的価値」の4側面に整理された。特に、リラックスや落ち着きといった心理的効果に関する言及が多く見られた。一方、行動意図(Q2)は、「感情調整としての活用」「対人関係・コミュニケーションへの活用」「家庭での実践・習慣化」「条件付き実践」に分類された。なかでも、イライラ時や緊張時にお茶を飲むといった感情調整に関する意図、および家族や友人とのコミュニケーションに活用する意図が多く確認された。認識と行動意図の対応関係に着目すると、心理的価値の認識は感情調整としての活用意図へ、他者との関係性の中での価値認識はコミュニケーションへの活用意図へとそれぞれ接続していた。また、淹れ方や温度に関する技術的理解は、自宅での実践や技能の再現といった行動意図へと結びついていた。さらに、イベント間の比較では、大学生を対象としたイベントでは感情調整に関する言及が相対的に多く、緑茶が「気持ちを整える手段」として認識される傾向が強かった。一方、社会人を対象としたイベントでは、家族や他者との関係性に関する言及が多く「コミュニケーションの媒介」としての側面が強く見られた。

以上より、お茶体験は参加者に対して心理的価値、対人関係的価値、実践的価値を多面的に認識させ、それらが日常生活における具体的な行動意図へと接続される可能性があることが明らかとなった。

考 察

本研究から、お茶の淹れ方に関する専門知識の提供を伴う体験が、リラックスなどの心理的価値の認識を促し、知識の獲得のみでなく具体的な行動変容を促す可能性が示唆された。結果からは、大学生を対象とした場合には、個人の内面状態が、社会人を対象にした場合には、家族や対人関係といった社会文化的文脈における価値が重視される傾向が確認された。ここから、お茶体験は、心理的・対人関係的・実践的価値の再認識を促し、それらが感情調整やコミュニケーション、生活実践といった行動意図へと接続されるプロセスを有していることが明らかとなった。以上より、お茶の文化的価値を現代において再活性化する上で、体験型のアプローチが有効である可能性が示された。

引用文献

- 細川裕子(2020) 大学生の緑茶の嗜好と意識, 目白大学短期大学部研究紀要, 56, 1-12.
 松山 洸一(2016). 現代の日本におけるリーフ緑茶の飲用理由および飲用実態. 日本家政学会誌, 67, 90-98.
 農林水産省(2024). 茶業及びお茶の文化に係る現状と課題.
<https://www.maff.go.jp/j/seisan/tokusan/cha/attach/pdf/230929-7.pdf>
 (2025年5月1日取得)

付 記

本研究は株式会社福寿園への学術指導の一環として行われた。本研究に関して申告すべきCOIはない。